

学校物語（国吉小の巻11）

～新校舎は舟岡に～

余 木 令 一

南北両校を一つにまとめることは決定した。しかし、どちらがどちらを吸収するかで、またもめた。双方の胸算用はそれぞれ自校に有利とみていたからである。これで統合は一時暗礁に乗りあげてしまった。歴史はくりかえすという。人間のなすことは今も昔もたいして変つてはいないようだ。最近町村合併に伴なう中学校の統合も紛争がつきものだ。とどのつまりが甲乙両校の中間地帯にということに落ちつくのが常例であり、且つ常識だ。

そのときの場合もここ舟岡の地が統合新校舎建設の候補地として脚光を浴びることとなつた。いうまでもなくここが両校の中間に位置していたからである。とはいつても、当時この地は官有地であり、かてて加えて樹木鬱蒼の丘陵地帯なので、払下げを受けるにせよ、地ならしするにせよ、おいそれと事はかんたんにはこびがたい事情下にあつた。

この複雑な状況を聞き知つた吉野一松氏は、ここでも縁の下力持ちを大いに發揮してくれ、官有地の払下げその他に骨身をおしまず奔走してくれた。

払下げが許可されてみれば南側も北側も自説を固執できず、しぶしぶながらも舟岡の地に決定することに同意した。伐木、整地よろしく明治三十三年には地鎮祭がとり行われることとなり、統合学校の新規建設は、いよいよその緒についた。かくに新校舎の完成するまで南校は国吉尋常小学校南教場北は同北教場と呼ばれた。

新校舎の建坪は二百五十坪、瓦葺き木造だが、もちろん洋式。つくりは当時、大工（だいく）さんの使つていた曲尺型である。予算案にみる総工費は三千五百円であるから、坪当りわずか十四円にすぎない。現今、駅で買うアイスクリーム一筒にも値しない。この時代の貨幣価値はなんとこんなにも高かつたのである。まつたくもつて、うたた今昔の感にたえないというものだ。

ところで新校舎が着々完成に近づくにつれ、一般父兄の心は逆に不安動揺の色を濃くするのであつた。南北両校の生徒が一緒になつた際におけるケンカ乱斗の姿がまほろしの大写しとなつて、だんだんせまつてくるからである。だれでもが、みんなこのような幻影になやまれたようであつた。前にも述べたように気の弱い生徒は統合が未だ現実のすがたをとらないうちから、早くも逃げをうつて他村に転校したりした。統合は果たして生徒たちにどんな結果をもたらしたのであろうか。